
俺と魔王

ねむこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と魔王

【Nコード】

N7344M

【作者名】

ねむこ

【あらすじ】

異世界に召喚された俺は軽く絶望した。理由は簡単、目の前にいたのがイケメンだったからだ。これはごく平凡な俺が、元の世界へ帰る（予定の）物語・・・のはずだ。 不定期更新です

第一話 召喚された俺

俺は泣いた。

力の限り泣いた。

それはもう濁流が渦を巻くかのごとく。

目の前には男がいる。

それはもうお前存在していいのか？というくらいのイケメンが。足元では素敵な魔法陣が「ごめんよ」と詫びているようだった。

俺は泣いた。

普通ここで登場するのは少女、もしくはお姉さん（こうなったらギリギリ熟女でもオツケイだ！）しかないだろう。

俺は泣いた。

だが俺の表情筋が動いた様子は皆無だったようだ。

無論涙も流れていない。この16年俺の表情筋は常に省エネモードだ。

ゆっくりと神々しいイケメンが俺に近づく。

だがちよつと待ってくれ。セオリー通りなら初めて出会ったひと（当然女性に限る！限らせてくれ！！特に巫女とか王女！）が恋人になつたりするのだ。何が悲しくてイケメンと出会わにやなんのだ！魔法陣の外側に立ったイケメンが口を開く。

ああ、聞きたくない。お前の頼みなぞこれっぽっちも聞きたくない。絶対ろくでもないものに決まってるからだ。

しかしここで俺は閃いた。それはとても素晴らしい閃きだった。

そう！このイケメンに妹か姉がいる可能性だ！！未亡人マママンがいてもそれは除外だ！当然だろ？このイケメンにパパなんぞ呼ばれたくはないからだ！！

その可能性に気づいたとき、俺は自分からイケメンに近寄った。一歩分だけ。

イケメンは言った。

「すまん、間違えた。」

と。

俺は泣いた。

柔らかな風吹く草原の、見渡す限り草原のど真ん中にある屋根しかない小さな神殿で。

イケメンが一体なにをしようとしたのかはわからなかったが、俺は間違えて召喚されたらしい。

残りヒットポイントが1までダメージをくらっていた俺だったが、なんとかいつも通りの感情のあまりこもっていない声をだした。

「・・・で、本当はなにを召喚しようとしたんだ？」

「いや、ちよつと、その・・・」

わずかに視線をそらせるイケメンに俺はピンときた。

こりゃ、女をよぼうとしたな。

こんなイケメンでも他から女を召喚しなけりゃキツイ世界なんて俺はイケメンに激しく同情していた。

思いっきり哀れみをこめてイケメンの肩をぽんとたたく。

「まあ、誰にだって失敗はあるさ・・・」

俺の憐憫と同情と哀惜の混じった視線を受けてイケメンは傷ついたように弱々しく笑う。

きつと本当に傷ついているんだろう。

こいつはイケメンで性格も良さそうだ。なのにモテない世界なんて俺がいても仕方ないだろう？

俺を表す言葉は平凡マスター、または旅立ちの村に住む村人だ。村人ひなんて一回話しかけるかどうかの存在だ。家の引き出しにある薬草を勇者にパクられてハイサヨナラな存在。

やはりこんな俺ではこの世界では分が悪い。いや、悪いどころじゃない。最低ラインだ。

魔法があっても恋ができないんじゃない？こちとら呼びじゃないってんだ。もちろんイケメンは対象外だ。言うまでもないことだがな！

「じゃあ、そろそろ俺を元の世界へ帰してくれないか？」

この世界に見切りをつけて俺は帰る。
元の世界へと。

「・・・悪い、な。今は君を帰す方法がない・・・」

「・・・・・・・・・・な、な・・・ななっ・・・！」

なんだとうわああああああっ！！！！！？？？

そつ、そつだ！もいつかいやれ！！さっきの召喚もつかいやりやがれ！！このイケメンが！！！！」

「イケメ？・・・あ、いや、次の機会は半年後になる。それと、君を帰せるのも半年後だ。」

ふつ。半年後だろうが一年後だろうが帰れるという事実に俺はなんとか落ち着いた。

この半年をのりきれば俺は帰れる。こいつと疎遠になるのは得策じゃないと判断して、俺はイケメンに告げた。

「これから半年、お前に女心について教えていくつもりだ！お前ほどのイケメンなら女は即落ちる！だが安心してはいけない！釣った魚にもたまには餌をやれ！」

こうして俺のフレンドリストにイケメンが追加される。そしてイケメンは言った。

「よくわからないが・・・どうやら君はいいやつだな。これから半年、我が魔王城で暮らすといい。できるだけのもてなしはさせてもらう。」

と。

俺は旅立ちの村に住む村人だ。LVなんて1かそれ未満に決まってる。勇者のLV1とはわけが違う！溝は深いのだ！！なのになぜ

魔王と住まねばならんのだ！？相手はラスボスではないか！！？
俺のなけなしのヒットポイントが簡単に決られる。1しかなかった
それは当然オーバーキルされて・・・

俺は倒れた。

倒れた瞬間、俺を受け止めたなにかは柔らかかった気がした

第二話 目覚めた俺

目覚めると俺はベッドの上だった。

ぼんやり見回し、どこの豪邸かと考えたところで思い出す。

そうだ、俺はイケメンに拉致されたのだ、と。

もう一度部屋を見回す。部屋は広く、大きな窓から光が差し込み妖精さんでも訪ねてきそうだ。白い縁取りの窓の両脇には白いレースのカーテン。家具はアンティーク調でベッドも天蓋つきな上どでかい。布団もふりふりな飾りがついている。どこだここ。あ、魔王城か。魔王城？

魔王城つてもつと基本黒か紫でツンツントゲトゲしてて飾りは骸骨やら蝙蝠の翼とかでどこからともなく変なものが溢れ出ているようなもんじゃなかったのかよ！？

ああ、魔王城のイメージが覆される。

かすかにダルい体でベッドからおりと、手近な椅子にこげ茶色のローブがかけられているのに気がついた。たぶんこれを着ろってことなんだろうが・・・少し体にあてて、やめにした。

これは蹟く長さだ。俺には無理だ。

ローブを椅子に戻し、これからどうしようかと迷っていると扉を小さくノックする音がする。扉を見ればわずかに開いて中の様子を見ようとしているようだ。どうやら無理に起こす気はなかったのだろう。寝てるならまた後にするとか。

ほんとに性格が良いイケメンだな。魔王だけど。

「起きてるよ。」

一声かけるとイケメンがゆっくり扉をあけて入ってくる。こうして同じ高さに立ってわかったのは、このイケメンと平均より若干・・・若！干！だが低い俺との身長がほぼ同じということだった。むしろ俺しか僅かだが高い。よし。

イケメンはズルズルした長さのローブを着ている。色は灰色で袖も長い。指先がちょっと出ているだけだ。もっと派手なものを着てもお前なら似合うだろうに。

輝く金髪と煌く紫水晶の瞳に少し毒気を抜かれたような気がする。部屋が部屋だけにイケメンのせいだけとも言切れないが。

「ここまで魔王、さまが・・・」

なんと呼んでいいのか迷い、一応間違ではないだろう呼び方をした。その瞬間、ちよつと顔を曇らせたイケメンにピンとくる。

「あーっと、俺の名前は有沢悠也。たぶんあつてと思うが、ここ風にいえばユウヤアリサワだな。で、魔王さまの名前は？」

「えっ、あ・・・私はパトリシアファンテミュー。その、よろしくな。」

わずかにほえんだイケメンが少し可愛く見たのは錯覚だ。俺は起きたてだからな。

でもパトリシアって女の名前じゃなかったか？・・・そうか、この顔なんだ。女だと勘違いしてつけられたのかもな。こいつくらいのイケメンなら子供のころはよく女に間違われたことだろう。

悲しいことにその経験は俺にもある。お前の気持ちは痛いほどわかるぞ。

「こっちこそよろしくな。俺のことはユウヤでもユウでもどっちでもいい。お前のことはなんて呼べばいい？」

「わ、私のことはパティと呼んでくれ。」

そりゃそうだよな。人前でパトリシアなんて呼ばれたくはないもんな。絶対からかわれる。

俺の中でパティに対する親密度が1上昇する。1だ。1だけだ！

第三話 懐かれた俺

あれから一ヶ月ほど経った。

この世界はパパパーテ、神の掌という意味らしい。

パパパーテが神の掌。パパが神でパーテが掌か？またはその反対か？
どんな言語にしるパパパーテなんて二つとある名じゃないな。

そんな世界で気づけば俺のパティに対する親密度は40になっていた。

俺は目が腐ってきたのかもしれない。

日が経つにつれパティが可愛く見えるときがたまにあつて焦る。

今思い返せば最低一日一回は親密度が1は上がっていた気がする。

おかげでパティも変に懐いていて今さらよそよしくするのも気が引ける。

そういえばこの城でパティ以外のヤツに会った覚えはない。

ああ、だからパティは誰かを召喚しようとしたのか。

こんなところに一人ぼっちじゃ寂しいもんな。

それで話し相手とか友達とか喚ぼうとしたのかもしれない。

勝手に女と決めつけて悪かったな。

「なあ。この世界の衣装の流行なんて俺は全く知らないわけだが、
パティにはそういう色よりもっと明るい色の方が似合うと思うぞ。」

パティの焦げ茶一色のずるずるローブを見ながら、ふとそんなことを口にした。

前々から思っていたのだがパティはどうしてこんな地味で暗い色ばかり着ているのだろう。

例えばこれが流行の最先端だとしても俺は認めん。絶対認めん。

「そうだ、パティに合うサイズでいらない服とかないか？」

そう言った俺が連れて行かれたのはパティの衣装部屋だった。

部屋は小ぢんまりしていて、そこにあったずるずるローブは思っていたより少なかった。

その中からパティが持ってきたのはクリーム色のずるずるローブとサーモンピンクのずるずるローブだった。

「この2着ともいらないの？」

こくりと頷くパティ。

「なんで？」

純粹な疑問だった。たしかにクリーム色とサーモンピンクなんて魔王が着る色じゃなさそうだが、持ってるってことは前は着てたんじゃないか？

「・・・色が、子供っぽいから・・・」

少し恥ずかしそうに言ったパティが可愛く見えた俺はやはり目が腐っているな。

それにしても着る予定のなくなった服をまだ持つてゐることはパーティはものを大事にするヤツみたいだ。もしくは他の何かにリサイクルするつもりだったのかもしれない。やっぱ良いヤツだ。

パーティに対する親密度が1上昇する。

ま、これは仕方ないか。勿体無い精神は日本人の心に響くものがあるからな。

「この2着、俺が好きにしてもいいか？」

クリーム色のずるずるローブとサーモンピンクのずるずるローブのハンガーを片手ずつに持ち、やや持ち上げてみる。

どちらも今パーティが着ているずるずるローブとほとんど変わらない。2着を順に見てから俺をじっと見つめてパーティは小さく頷いた。

これなら多少手を加えるだけで少しはマシなものができるかもしれない。

自分の部屋に持ち帰るとベッドの上にずるずるローブを広げ、裁縫セットをパーティに借りて作業に入る。

あ、と思って立ったままのパーティを見上げた。

「ちょっと時間がかかるから、お前は好きなことしていいぞ。」

しばらくは単調な作業が続くはずだ。こんな作業見てもつまらないだろうと思ったが、俺の手元を見ていたパーティが一つ頷くとポスンと右隣に座る。

「邪魔じゃないなら見てる。」

ハサミを持つ手を見つめるパーティを横目で見てから俺は作業に入
た。

まずはクリーム色のずるずるローブの首周りをカーブを描くように大きく切り取り首のラインと鎖骨あたりが出るようにする。次に腰のあたりでバツサリと裁ち、下のずるずる部分と分ける。

袖にとりかかろうとして、パティの肘の位置を確かめようと隣を振り返った。

「パティの肘ってどのへん？ちょっと袖捲くってみ？」

少し首を傾げたパティが左の袖を捲くる。

なんつーか白くて華奢な腕だな。まあパティなら筋肉ムキムキで大剣振り回してるよりは魔法を使う方が似合ってるかと納得する。

ハサミを置くとパティの左腕を持ち上げて肘の位置を確認する。

肩からこのくらい、と目星をつけてクリーム色の袖にハサミをいれる。

もう一着のサーモンピンクのずるずるローブも同じように切っていく。

こうして出来上がったのは各々2色のパーツ、肘までの袖がついた胴部分と腰から下のずるずる部分、肘から先の袖部分が2枚と首周部分だった。

今回、首周り部分に使わないからこっちへ置いとく。

あとは端の始末をしてから色違いに繋げて……っと。

あ、いいこと思いついた。

裾で広がっていたずるずる部分の前側、左足の前あたりを縦に細長い三角形に切り取るともう一方のずるずる部分からも同じように切

り取り、交換して少し内側で縫いとめる。
こうすれば足が動く度に違う色がちらつと見えてオシャレだろ。
袖も先が広がったタイプだったので肘から先の部分にも応用する。
元よりは裾の広がりが抑えられた形に仕上がった一着目のずるずる
ローブ改をざつと確かめてから隣のパーティに手渡す。

「これ着てみ。」

受け取ったパーティが少し戸惑ったようにローブと俺の顔を交互に見
てくる。

思ったより少し派手になったが、まあ子供服をリメイクしたくらい
のもんだしな。やっぱ恥ずかしいか？でも一回着てみるともう一度
促すと、渋々パーティがベッドから降りて鏡のほうへ行く。

野郎の着替えなんざ見たくもないので、二着目の仕上げにとりか
った。

俯いた視界にそつと入ったサーモンピンクに視線を上げる。

俺はついに目が腐りきったことを自覚した。

そこにいたのはパーティはパーティだが、女版パーティだった。

どう？って感じでちよつと裾を広げてみせるパーティにお前はどこの
国の姫かと問いたい。

これは男これは男これは男これは男これは男これは男これは男これ
は男これは男これは男これは男！

こめかみに手をあて必死に呪文を唱える。

パーティは男、よし。

「いいんじゃないか？さっきのよりは良いと思うぞ。」

俺の指先マジックで華麗な変身を遂げたパーティに笑顔を向けた。

第四話 再び召喚された俺

どこか嬉しそうにしていたパティの表情が変わる。
はっとしたように床を見つめ、そして俺を見た。

「ユウ！」

焦ったように俺を呼ぶと自分のしていた首飾りを引きちぎり俺の手に押し込む。

なんだ？いつものパティらしくないぞ。

首飾りを返そうとした次の瞬間、俺の全身が光に包まれ半透明になっ
ていく。

イヤな予感がする。慌てて立ち上がり足元を見れば変な模様の魔法陣が回転していた。

これはアレだ。元の世界に帰れるか別のヤツに召喚されるか。

「ユウー！」

かすれゆく視界でパティの悲痛な叫び声だけが鮮明だった。

俺は泣いた。

戻ってきた視界に俺は帰れたわけじゃないことを知ったからだ。

白い柱の数々と白い壁、床も天井も白い。なんか神殿の一室っぽい。

手の中の首飾りを涙目で確認する。紫の石のついたシンプルな銀色のチェーン。

パティの瞳と同じ色のそれをズボンのポケットにしまって、まわりの人物を見回した。

金髪の男が二人、金髪の女が二人、こげ茶のしょぼしょぼの髪のおっさんが一人、赤い髪の女が一人。それぞれ豪華な服装だった。金ぴか軽装鎧に引きずった分厚いマントとか派手派手ドレスとか。大きな石のついた指輪とか首飾りとかじゃらじゃらつけて、それでいて衣装との統一性がない。全てが自己を激しく主張している。はっきり言って趣味が悪い。

俺は泣いた。

パティに慣れたせいかもしれないが恋ができそうなのが一人もいないことに。

どうしてお前らはそんなに老けているんだ。

そのうえお姫様っぽいなんて二人とも化粧がけばすぎる。若作りを多大に失敗した感じた。

王子っぽいのはどっちも下半身白タイツにショートブーツのみだ。

なんでだよ！いやだ！こんな国で俺は恋なんてできそうにない！恋をがんばりたくもない！

俺は流れてもいない涙を拭った。

おっさんが一人だけ王冠みたいなのかぶってるからこの人は王様か？

金髪の四人は顔立ちからして兄妹だろう。じゃあ赤い髪の女はお妃さまか？

だとしたらこの兄妹、両親のどっちにも似てないぞ。

つかお妃さま、こんなでかい子供が四人もいるようには見えないん？なら金髪の兄妹は誰から生まれたんだ？もしやお妃さまは後妻か？

まあ、見ず知らずの他人の家庭事情なんてどうでもいいか。それより早く帰してくれ。元の世界かパティんここに。

だいたいさつきから金髪男二人の俺を見る目が気持ち悪い。
上から下まで舐め回してるような視線に辟易する。

何の目的で喚んだのかは知らんが友達が欲しくて召喚したパーティの
ほうがマシだ。

あいつはそんな目で俺を見なかったからな。態度も紳士で控えめ。
やっぱパーティしかマシだ。

こんなところでパーティへの親密度が1上昇する。まあこれも仕方な
いか。

おっさんが一步前へ出た。

「わたくしめはこの国の王を務めております。異世界より遠路はる
ばるようこそおいでくださいました、勇者様。」

揉み手というものを俺は生まれて初めて見た。マジで揉むんだな。
へえ。

「ああ、突然のことに驚かれたのですね。ですがあなた様は間違い
なく勇者様ですぞ。こうしてここにすることが何よりの証拠。」

ほっほっほ！と何がおかしいのかおっさんが一人笑っている。

何だか悪徳商人に引っ掛かった気分だ。これは逃げるに限るな。

だがここがどこかくらいは把握しておくべきか。

せめてパパパーテであってくれ。

「・・・異世界と仰いましたけどここは何という世界でしょうか？」

できるだけ下手に出ておく。

薄い頭髪、でっぷり出た腹、イヤな笑い方。

見た目からして上からものを言っではいけないタイプだろう。

こついう王様はキーキー騒いですぐに投獄とかしそうだ。

「この世界はパパーテ。古の言葉で神の掌という意味です。」

おっさんとは違う声に振り向く。

そこには金髪の男が二人、にこやかに立っていた。いや、にやにやか。

どっちが喋ったのか知らんがパパーテなら問題ないだろう。そんな名前二つとないだろうし。たぶんパティのいる世界だ。

「あなたには遥か東に存在する魔王を倒してもらいたい。もちろんお礼はさせてもらう。どうかな？」

背が高いほうのくるくるした金髪が言う。

「そうそう、魔王を倒してくれさえすれば君のことはオレ達が可愛がってあげるよ。優しく、ね？」

続けて低いほうのバカが言った。

こいつらマジか、気色わりいなとドン引いたところで金髪女二人がくすくす笑いあう。

「お兄様たちったら。彼女はまだここへ来たばかりですよ？焦っては逃げられてしまいましてよ、おほほほ・・・」

「うふふ、本当にお可愛らしい方でお兄様たちのお気持ちもわかりますわ。ねえ、お姉様？」

「ええ、そうね。おほほほ・・・」

「うふふふ・・・」

そうか、お前らにはこの俺が女に見えるわけか。

子供の頃だけかと思っていたんだが・・・なのにお前らは今の俺でもそう見えると。へええ。

誤解を解くべきか解かざるべきか。

もちろん解かずにさっさとおさらばだ！

万が一あっちの姉妹に迫られたら俺の大切な何かが失われる気がする。

こっちの兄弟も同様だが女と思ってるうちは多少は油断してるはずだ。

それにしても魔王を倒すために勇者なるものを召喚するようなヤツらだ。

どっかに伝説の武器とか防具とかもあるんじゃないか？

そんなものを持った勇者があいつに喧嘩を売るのは困る。

パーティは性格が良いが友達もいなかったようなヤツだぞ。しかも独身で一人暮らしだ。

いきなりの来客が勇者で敵対者なんて、そんなの寂しすぎるだろ。

ここはもうちょっと穏便にいきましょう。

「あの、こちらに魔王に対抗できるような勇者の装備や伝説の装備などございませんでしょうか？私の世界では勇者はそのようなものを装備して旅立つと聞いておりますので。」

本やゲームの中の話だけだな。

パーティの友人第一号としてはそんなものがあればそれらになるべく頂戴して去るのみだ。

相手の言葉を待っていると、ちょっと存在感が薄そうな赤い髪の女がおっさんの袖を引く。

「あなた、あれのことではございませんの？」

どんぴしゃ。

赤い髪の女がお妃さまだったことと、そついう装備があるらしいことを知った。

第五話 伝説の装備を見た俺

通された宝物庫で俺は泣いた。
すっげーしょぼい。

こいつらはギンギラギンでケバケバしいのに宝物庫がほぼ空とは。
まあ俺には関係ないか。

さっさと貰うもん貰っておさらばするだけだしな。

宝物庫の中をお妃さまの後を追って、ついでに物色する。
たいした量もなく、指輪とか腕輪が黒い台の上にぽつぽつ転がって
るだけだ。

まじでしょぼい。

こんなところに勇者の装備なんてほんとにあるのかよ？
あたりを見回したため息を吐きかける。

『なあんじやお主！いったいどこに目をつけておるのじゃ！妾の可
憐な姿が目に入らぬのか！？この無礼者がっ！』

「いー！」

うろろろ纏わりつくちゅちゅええのを無視していたら、怒鳴られたう
えブーツの踵で足を踏まれた。

それなんて凶器。

急に蹲った俺をお妃さまが不思議そうに振り返る。

何でもないですと立ち上がったが、背中には銀髪幼女が首を絞める
ようにぶら下がっている。

みんな総スルーなので無視していたが、これはいただけない。

半分透けてるからきつと幽霊だ。宝物庫に住み着く幽霊・・・おお、

恐ろしや。

『なっ、妾は幽霊などではないわ!』

器用にぶら下がりつつ後頭部を強打される。

まじで痛い。それと俺そんな趣味ないからね？

あと人の思考を勝手に読まないでほしい。

後頭部をさすりながらたどり着いたのは、そんなに広くない宝物庫の一番奥だった。

そこには燦然と輝く鎧・・・ではなく、一枚のマントがあった。壁に掲げられた古ぼけた茶色の、ポンチョみたいな・・・

なにこれ。絶対魔王倒せないだろ。

むしろ足手まとい、
『見てわからぬか!』

人の背中を蹴って飛び降りると、そこから「とうっ」と掛け声一発、マントの手前に華麗に着地する。

しゃがんだ背中を向ける、黒いドレスに銀髪縦ロールの半透け幽霊もったいをつけてゆっくり立ち上がると、さらっと手で髪を払いながら振り返った。

『妾こそ数百年の時を経て今ここに復活せし・・・お主、何をやっておる?』

俺はさっきお前に蹴られたせいでぶっ倒れてるんだよ。

訝しげな眼差しを向けてくるのはこいつだけじゃない。

お妃さまも見てるし後ろの5人の視線も感じる。

よろりと立ち上がり、何事もなかったようにお妃さまを見た。

「これがそうですか？」

「え、ええ、そうですね。今まで誰も装備できたものがないといわれておりますの。」

装備する気がなかっただけじゃないのか？

改めて見てみても、ただの古ぼけたポンチヨ、

『うっさいわこのたわけ！』

「あがつ！」

横から飛び膝蹴りを脇腹に食らって俺は悶絶した。

それがどう見えたのか、お妃さまが「やはり伝説の装備だったのですわ！」とか言い出すし後ろでは「これが継承の儀式！？」とか言ってるヤツもいるし。

俺は本気で泣いた。

第六話 契約した俺

ああそうさ。心のどこかでわかってはいたさ。
こいつがただの幽霊じゃないことぐらい・・・

『では準備は良いか？』

ごくつと喉を鳴らしたポンチヨの精・メルティアーナが桃色の唇を
舌先で湿らせる。

「ああ、いつでも。」

メルの前に正座して顔の高さを同じにして、俺は待つ。
この返答も幾度繰り返しただろうか。

『ではゆくぞ。覚悟はいいな？』

その手にあるのはあの古ぼけたポンチヨ。

今日は泊まれと与えられた城の一室。

その部屋のベッドの上で、俺はポンチヨに首を通した。

「うむ！これで妾との契約は完了じゃ！お主よく耐えたの！」

間近で嬉しそうに笑ったメルが唐突に半透けじゃなくなった。

部屋の鏡を見て、そこに元半透け幽霊がはつきり映っているのを確認する。

つまりあれだ、実体化できるようになったと。

助かった。これで俺が一人どつき漫才をやっているわけではないとわかってもらえる。

ふうつとため息を吐いて足を崩すと、じいつと見てきたメルがニヤツと笑った。

「だらしないのう。もう疲れたのか？ んん？」

人の足が痺れてると思って、ニヤニヤしながらつついてくるメルをやめさせようと手を伸ばす。

「おーすげえ、これが本物の百合か。良いものが見られましたね、兄上。」

「そうだな。これがガールズラブだ。美学だな、弟よ。」

変態白タイツ兄弟ここに極まれり。

部屋の扉のところに現れた喜色満面な変態兄弟を啞然と振り向いた俺の記憶が確かなら、この部屋の扉の鍵は2つで両方とも俺はちゃんとロックしたんだが？

合鍵がマスターキーがあったとしても、結界を張ったと言っていたメルが呆然としている様子からこいつらは侵入のエキスパートではないかと推測する。

こんな国、いや、こいつらなんて滅べばいいのに。

何とか変態兄弟を追い出して、指差し確認のもと再び鍵をする。

結界を張りなおしたメルが大きく頷いて、ぐつと親指を立てた。

俺も親指を立てて返すと、妙な連帯感と達成感が湧き上がってくる。

何だこのやり遂げた感は？

これで世界は平和になった、くらいのナレーションが聞こえてきそうだ。

「お主と契約を成した妾の結界は完璧じゃ。これでもう邪魔されることもあるまい！」

腕を組んでうんうん頷いているメルの顔は晴れやかだった。

ところでこのポンチヨ、見た目は古ぼけて薄汚、

「くたばれ！」

「かはっ！」

見下ろせば、メルの捻りを加えた右ストレートが確実に鳩尾にめり込んでいる。

俺はこんなところで死にたくはない。

それにパティの友達増やそう計画のこともある。
当然、俺は従順の道を選ぶ。

あー、こほん。

この素晴らしいマント、見た目からして歴史を感じる美しい一品でございまして、

「お、お主にそんな風に思われると気色悪いな・・・」

どうしろとおっしゃるんですか、お嬢様。

仰け反るようにして両腕をさすり顔を顰めているお嬢様をため息を吐いて見つめる。

「いや、今まで通りでいいというか何というか・・・あれじゃ、余計なことは考えるな。な？」

「じゃあ人の心を勝手に読むなよ。」

メルが跳び上がった放ったハイキックが易々と首にキマる。

俺は泣かなかった。

その前に昏倒したからだ。

翌朝、俺たちは早々と城を出た。

こんなところに長居はしたくないし、さっさと帰ってパーティに新しい友達を紹介してやらねばなんからだ。

第七話 旅立った俺

「なあ。」

「わかっておる。」

メルと二人でちらつと振り返った先には、白いタイツが生えた草のかたまりがあった。それも二つ。知りたくもない中身には多大な心当たりがある。

「こんな何も無い平原のど真ん中で移動するものがあれば嫌でも気づくわ。」

「それがとってつけたような茂みじゃなおさらな……」

前を向きなおし二人ではあ、とため息を吐く。
そのときだった。

3歩ほど前の空間がゆらりと歪み、さも空間を越えてきましたと言わんばかりにガタイの良い黒いリザードマンが現れた。
腰に提げた抜き身の円月刀と、太陽の光を跳ね返して煌く硬質な鱗がその存在をしっかりと主張している。

「我は魔王様の配下が一人、豪腕のガルデイス。勇者よ、これ以上先には一歩たりとて進ませまいぞ。」

2mはあるガルデイスの顔が無表情に見下ろしてくる。
これは疑いようのない死亡フラグ……だが、この俺の本気を見て

もそんなことが言えるかな？

「私はただの通りすがりの村人です。勇者様ならあちらにいらっしやいます。」

すつと脇にどいて、遙か後ろの茂みを手で示した。
ちらつとそっちを見て、もう一度俺を見るガルデイス。

「・・・おお、そのようだな。足を止めて悪かった。失礼する。」

LV1以下の村人オーラに気づいたガルデイスが見事な礼をして後ろの茂みのほうへ歩いていく。
それをしばし見送って、俺たちは再び歩き出した。

しばらく行くと森があり、少し奥には泉も発見した。

ちよつと休もうかとあたりを見回した視線で、立ちかけのフラグに気がついた。

森で悪漢二人に襲われているケモミミ幼女。

真っ白いふわふわのウサミミに、少し長めに切り揃えた榛色の髪が揺れている。

淡い桜色のワンピースには、首のこと袖先と裾に白いもこもこがついていて、同じような白いもこもこがついた淡い桜色のニーハイがつくり出す絶た、

「早よう助けんか！」

「いだっ！」

思いっきり人の頭をハリセンで叩けるならお前が、

「妾は無駄なことはせん主義じゃ！」

腕を組んでふん！とそっぽを向いたメルをじとつと見下ろす。
今のは無駄なことじゃないのかよ。

「何じゃ？」

「イイエ、ナンデモゴザイマセンヨ。」

はあつとため息を吐いて、武器を・・・あれ？俺って武器なくね？
現在の装備を確認する。

高校の夏の制服一揃いなーり。

メルポンチヨ一枚なーり。

紫の石が一個なーり。

以上なーり。

あつれー？まじ武器ないんですけどー。

「根性を見せるのじゃ！」

俺は泣いた。

根性って、そんな・・・

手ぶらで渋々そこへ向かった俺に、早くも悪漢の一人が気がついた。

「ああっ！兄い！助けが来やしたぜ！」

「何！？あああ助かった！その君！」

なぜ悪漢が涙を流してこつちを見ているのだろう？

頭の後ろを搔きながら、なるべく穏便にすむよう願う。

「えーっと、そのへんにしてあげてくれませんか？そんな小さな女

の子を虐めてもつまらないでしょ？」

「な！ごっ、誤解だ！俺たちはっ」

「君は誤解してっ」

必死の形相で叫び出したうちの一人をどんっ！と突き飛ばし、何とか逃げ出せたウサミミ幼女が俯いて駆け寄ってくる。

その後ろでは、突き飛ばされた男がもう一人を巻き込んで泉に水柱を立てていた。

結構深そうだな、成仏してくれ。

一応拝んでおいた。

「なあんでお前がついてくるのじゃ！さっさと去ね！すぐに去ね！」

蹴るマネをしているメルを静かに見返すウサミミ幼女。

「わたしはご主人様に助けていただいた。だからご主人様についていくの。」

・・・ん？

「ご主人様って、もしかして・・・」

「そう。ご主人様はご主人様。」

「なあんじゃと！？この小動物が！」

「・・・ふっ、それはあなたも同じ。」

いいなあ、子供ってすぐ仲良くなれて。

和み要員も増えたし、これでさらにパティの友達が増えるわけだしな。

「んじゃ行くか。」

「はい。ご主人様。」

「・・・くっ！」

幼女ばかり引き連れて、俺は魔王城を目指し歩き続ける。

第八話 森の奥へ入った俺

「わたしはファム。種族は見ての通り。」

ぴこつとウサミミを動かしてファムが心細そうに見上げてくる。

そんな彼女をなるべく怖がらせないように、省エネモードの表情筋を駆使して何とか微笑む。

「俺は人間のユウヤ。それでこっちはメル。ポンチヨの精霊だよ。」
「阿呆！ポンチヨではないわこのたわけ！！」

いつものごとく俺を狙ったメルの拳を、腕をクロスさせたファムがしっかりと受け止めた。

さすが子供とはいえ獣人だ。
いい反射神経をしている。

「ちいっ！」

たたとバックステップで離れたメルをファムが即座に追いかけていく。

火の玉が降ったり、それを避けたり弾いたり・・・

異世界の子供たちは遊び方が桁違いだな。

平原で遊んでる二人を置いてさらに森の奥へ入って行くと、かすか

に助けを求める声が聞こえてきた。

普段なら怪しいものには近づかないが、その声が助けてくれたら仲間になります的なものに聞こえて、声を辿るように茂みをかき分け進んで行く。

少しして見つけたのは、紫のぼろ布を纏い蹲るようにして木の幹に凭れている子供だった。

伏せた顔はわからないが、その足元でとぐろを巻く珊瑚色の髪は真っ直ぐでかなり長い。

だが問題はその耳だ。

とがった耳先。

つまり・・・エルフ。

ファ、ファンタジー！！

虫が花に誘われるようにふらふらと近づき、その傍にしゃがみこむ。

「大丈夫か？おじよ、」

いや、大丈夫でもないしお嬢ちゃんもないだろ。

そもそも髪が長いからって女子とは限らん。

「う、あ・・・これを・・・」

声に反応したのか、顔を上げたエルフの子供は冷や汗を流し生気のない顔色をして足首に絡まった蔓を指差している。

よくわからんがエルフ用の罌か何かにかかってしまったのだろう。

青い蔓を2、3度つついてから握って、引き千切るように力をこめる。

蔓は思ったより簡単にぶちぶちと千切れたが、その足首についた蔓の痕が青黒く変色していてかなり痛々しい。

どうやらこの蔓はエルフにだけ影響があるようだ。

一つ頷き千切れた蔓を見てみると、深呼吸をした子供エルフが背中

を木の幹に預けるようにして立ち上がろうとしはじめた。

「立てるか？」

手を貸そうとすると、少しだけ赤みが戻った顔でにっこりと精一杯らしき微笑みを向けてきてそのまま一人で立ち上がる。

脇にはおもちゃみたいな弓がぶら下がっていて・・・

それがなんだかとてもいじらしくて、ついぼろりと口にしてしまった。

ああ、出てしまったんだ。

俺は早くパティンとこに行かなきゃなんのに。

「村まで送って行こうか？」

驚いたように緑の目を丸くしてから子供エルフがわずかに首を振る。

「あ、あたしははぐれなの。だから村なんて、えっと・・・」

子供でもはぐれっていうのは村に入れないってことか？

でもこのままじゃまた罠にかかってそうな気がするし、子供エルフも少し俯きながらちらっちらっを見てくるし・・・

「んー、じゃあ一緒に来るか？これから向かう先は魔王城だけど。」

OKしてくれるならまたまたパティに友達が増えるのだから・・・
事情を知らない子供エルフが人差し指を顎にあてて首を傾げる。

「どうしてそんな危ないところへ行くの？」

「俺がそこに住んでるからだよ。」

「どうしてそんなところに住んでいるの？」

「魔王と俺が友達だからだよ。」

「どうしてお兄ちゃんと魔王はお友達なの？」

「あいつがイヤツだからだよ。」

「じゃあ怖くないの？」

「ああ。魔王は素直で優しくてイケメンで素敵なヤツさ。」

心でキラリと微笑みそう言つと、考えるように子供エルフが視線を下げた。

少しして、とても大切なことを決心したようにその大きな目で見つめてくる。

「うん。あたし、お兄ちゃんについていきたい。」

人助けもしたし新たな人員も確保できたし。

良かった良かったと、まだ回復しきっていない子供エルフをおぶつて戻る。

一瞬戻る場所を間違えたかと思ったほど、荒れ果てた平原で二人はまだ遊んでいた。

異世界の子供つてめっちゃくちゃ元気だな。

第九話 心の友を見つけた俺

『おいその、』

「シーア、本当にもう平気なのか？」

「うん。お兄ちゃんがここまでおんぶしてくれたから・・・」

少し照れたように笑ったシーアが左隣に並ぶと、今度はメルがえへん、と偉そうに胸を張ってわくわくしたような目で見上げてくる。

「じゃあ次は妾をおぶ、」

「みえみえ。」

「ほう？なら、小動物その一は構わんのじゃな？」

「・・・痛っ！ご主人様あ、足がとっても痛いですう。」

「！？」

どうやら足が痛いのを相当我慢してたようで、しゃがみこんだファムが足を押さえて潤んだ茶色の瞳でじっと見上げてきた。

「ったく、お前らはまだ子供なんだから。今度からは痛くなったらすぐに言っただぞ？んじゃ・・・」

森沿いの草原で、ファムの前にしゃがんで背中を向ける。

ここまで休憩も無かったし、やっぱり子供だけじゃそんなに歩けないもんなんだな。

もう少しで町に着く予定だけど・・・一回休憩しようかと思った背中ファムが遠慮がちに乗ってくる。

「ほら、遠慮すんな。」

「それなら・・・」

首に腕を回したファムをおんぶして立ち上がると、一回揺すって安定させる。

それでも不安だったのかぎゅっとしがみついて首筋に頭をくっつけてきた。

「あつたかい・・・」

「ムーカーツークー！なあんじゃその勝ち誇った顔は！お主もお主じゃ！そんな簡単に騙されおって！！」

「メルちゃん？ファムちゃんは足が痛いって言ってたからしょうがないよ？」

シアと話してるメルがぶるぶる震えていて、きっとあいつも足が痛いんだろうと簡単に予想できる。

次はメルの番だな、と思いながら素通りしようとした森と平原の境にある飾り気も屋根もない段差だけの小さな祭壇には黒一色の長剣が意味ありげに刺さっていた。

『おい小僧、この状況でも我輩に気づかないとぬかすなら、』

「うっさいわ！このがらくたが！」

どこか苛ついたメルの放った火の玉が祭壇に刺さった黒い剣に命中する。

『・・・頼む。少しでもいいから聞いてくれ。』

俺は生まれて初めて剣が泣く瞬間を見た。

いや、見たんじゃない。感じたんだ。

そして直感が告げている。こいつは、心の友だ！

「剣よ、みなまで言うな。俺にはわかる。お前は理不尽な目に遭ってこんなところにいるんだよな？俺と同じじゃないか・・・だったら、この旅にお前も連れて行ってやるよ！」

ぐつと親指を立てて心でキラリと微笑むと、黒い剣が嬉しそうに黒光りした気がする。

『では貴様も感じたというのか、この、心揺さぶる波動を！』

「ああ！お前は俺の心友^{しんゆう}だとはつきりな！」

『そうか！ならば貴様を主^{あるじ}と定めようではないか！』

ずずつという摩擦音を残し、黒い剣が祭壇から抜けるとそのまま高い位置まで浮き上がる。

くるりと切先を上に向けてゆっくりと降りてくる姿は、黒くなければ伝説の剣のように神々しい。

それに右手を伸ばししっかりと柄を握んだ瞬間、ゆらりと剣のまわりが揺らめいてうつすら現れた黒い霧が剣身を取り巻くように漂いだした。

『我輩は闇の深淵より生じし暗黒魔剣デージェスタノーツ。さあ主よ、共に世界を混沌に導こうぞ！』

あー、やる気になってるとこ悪いがちょっと待ってくれ。

お前つてもしかして連れてっちゃダメな種類の剣じゃないか？

「置いてっついていいよな？」

気持ち、爽やかな笑みを浮かべて右手の黒い剣を見た。

『何故だ!?!』

「お前のことは忘れない。」

祭壇に元通りに戻すとわずかにキコキコ揺れて、何でどうしてと騒いでいる。

『主はメルティアーナを連れているではないか! なのにどうして我輩はダメなのだ!?!』

「え? お前メルを知ってるの?」

知り合い? とメルを振り返れば、メルは不機嫌そうに眉間にシワを寄せてそっぽを向いてしまった。

『・・・まさか、聞いてない、のか?』

えー! 嘘ー! と頬に両手をあてて黒い剣が仰け反ったように見えたのは気のせいかな?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7344m/>

俺と魔王

2011年2月4日04時10分発行